

令和元年度 第2回学都松本子ども読書活動推進委員会 議事録

日時：令和2年2月10日（月）10：00～12：00

場所：松本市中央図書館 第1視聴覚室

【出席者】

豊嶋委員長、上條副委員長、三ツ井委員、小林委員、百瀬委員、赤津委員、舟田委員、越高委員、小穴委員

（事務局）瀧澤中央図書館長、町田館長補佐、下條館長補佐、小林事務員、石原事務員

【議事録】

- 1 開会
- 2 館長あいさつ
- 3 委員長あいさつ
- 4 自己紹介

5 議題

【報告事項1 令和元年度 学都松本子ども読書活動推進事業報告】

事務局：説明

委員長：ボランティア養成講座の講師を一人で務めることについて、関わった者としては受講者と全6回を通して関係を積み上げていくことができた。回を重ねるごとに受講者の意欲が増していく様子を感じ取れた。

G委員：受講生として感じたことは、男性が一人だったのが残念だった。講師は一人の方がフレンドシップを保てて良い。このような講座は継続して開催して欲しい。

委員長：スキルアップ講座には多くの受講者が集まり、ボランティア養成講座の受講者以外にも、学校関係者、学校で読み聞かせボランティアをしている者、図書館職員等が見受けられた。良い学びの機会となった。

作業部会では、ブックスタートの選書について話し合い、方針が固まった。より良い方向を目指したい。

F委員：ボランティア養成講座の講師に関連して、以前自身の関わる講座では講師をリレー形式にしたことがある。受講者は、それぞれの講師から様々な手法を幅広く知ることができ、自分に合った方法を見つけることができた。講座には図書館職員が事務局としてではなく講師として関わるべき。受講者と職員がコミュニケーションを取ることで関係が築ける。

委員長：会議資料には載っていないが、ボランティア養成講座では図書館職員も補助に入

り、実演し、受講者と関わり関係を築いていた。次年度、より良い形を考えたい。

B 委員：大勢の講師に様々なやり方を提示してもらった方が良い。未就学児への楽しいおもしろい読み聞かせも大事だが、華やかなおはなし会でなくて良いから、小学生に読み聞かせを通して、自分で読む力を身に付けさせることが大事。図書館司書としての力を活かし、子どもに読書する力をつけるという狙いでやるべき。子どもに読んでほしい本は、それぞれの想いが入り、様々な意見があるため、ボランティアの中で統一の柱ができるとより良い。それが子ども読書活動の推進になる。

委員長：今年度はボランティア講座、スキルアップ講座の2段階の組み立てにし、スキルアップ講座は各年代を対象とした読書推進の講座を設けた。初年度から事業がこうして進んでいることを、委員には評価し、理解してほしい。

## 【報告事項2 令和2年度 学都松本子ども読書活動推進事業計画（案）】

事務局：説明

G 委員：ボランティア養成講座は、今年度修了した者もまた受けて良いのか。

事務局：定員があるため、ご遠慮いただく場合もある。今年度は6回のうち4回受講した者も修了としたため、来年度残りの2回を受ける者もいる。

委員長：まだ、事務局と詰めていないが、1回の講座では、覚えきれない部分もあるかと思う。そういった方には、聴講という形で参加してもらえよう検討したい。

F 委員：ブックスタート、セカンドブックの執行率が12月末段階で約70%だが、事情があり、保健センターに行くことができない子どもへの配慮はどうしているか。

事務局：ブックスタートは、保健センター職員が自宅へ訪問する際に配布している。セカンドブックは、後日図書館もしくは保健センターへ取りに来てもらったことがある。

F 委員：障がいがあり会場へ来ることができない子への配慮が必要だと感じる。例えば、ブックスタート発祥の地イギリスでは、さわる絵本がブックスタートで配布されている。本当に子ども達に本が届いているのか具体例を集めるべき。また、ただ本を渡すのではなく、どのように渡すかを考えていく必要がある。もし今後事例があれば報告してほしい。

事務局：公平に松本市の子どもに渡したいということで健診の時に本を渡している。平成29年度の受診率は、10ヵ月健診が97.4%、3歳児健診97.4%でほとんどの子どもが健診を受けている。子どもに本を渡す機会を生かしている。各家庭へ保健師が訪問する際に、本を渡すという対応はしているが、障がいのある子へ渡す本が、同じように各候補本の5冊、12冊の内容で良いかは今後の課題としたい。

委員長：作業部会で検討したい。例えば、NPO ブックスタートは、『じゃあじゃあびりび

り』の複本として、点字付きの用意があり、選択できるようになっている。

スキルアップ講座の内容に関して意見はないか。

副委員長：ボランティア養成講座は同じ講師だと軸がぶれない。乳幼児のための読み聞かせの講座は充実しているが、小中高生へのケアが足りていない。その年代への働きかけも充実するようスキルアップ講座の内容、回数を含めて検討したい。

委員長：「中高生への働きかけ」の作業部会は、初年度ということもあり実行できなかったが、スキルアップ講座に中高生への読書推進活動につながる内容を設けた。今後、作業部会で検討し、5ヵ年の内に実行へつなげたい。

C委員：松本版・信州型コミュニティスクール運営委員会があり、地区の公民館長が児童と地域住民の橋渡しをしている。ある小学校では、授業前に朝の読書の時間を設けている。小学生の本離れはなくしたほうが良いが、意識づけは、学校にいる者の方がやりやすいと感じる。各校が子どもの読書活動に対して行っていることを調査すると次の手を考えられる。公民館事業では、母親を対象とした読み聞かせ講座の開催は難しい。自身の地区では福祉ひろば、児童センター、公民館が協力して育児サロンをやっており、読み聞かせの催しを年1、2回行っているが、小中学校へ地域で関わっていくのは難しいと感じる。そのため授業中に先生の目が届く中で、小学生へ指導していただきたいと考える。

委員長：事務局側から、第1次計画から小中学校へ向けて行っている取り組みの報告を。

事務局：学都松本子ども読書活動推進計画は、松本市教育委員会で作っているものである。今回のご意見は、子ども読書活動推進庁内調整会議で提示し、関係課へ伝える。学校に関しては、学校教育課と連携し考えていきたいが、毎年職員との合同研修を開催し、また子ども読書カードで資料支援をしている。根本的な問題の解決ができるよう委員のみなさんの意見は報告し、担当課へ橋渡ししていく。土台ができるまでは、乳幼児向けの活動に力が割かれる。3年目以降に小中高生への働きかけに関して体系づけていきたい。

委員長：ボランティア登録者が、乳幼児から小学生へ向けてどのように本を届けていくか考え、先を見据えて自分自身の活動をしていくことが大事とボランティア養成講座では伝えた。スキルアップ講座を受講し、受講者の関心が広がっていく様子が見られた。今後、上の世代への活動につながっていくよう期待したい。

B委員：コミュニティスクールに関わって一市民として、未就学児の母親と小中高生の母親と子どもの読書への取り組みについては全く別物だと感じる。未就学児には熱心に読み聞かせを行っていた親が、子どもが小学校へ入学すると同時に手を引いてしまっているのを目の当たりにした。小学生以降の親に家庭読書の働きかけは難しく、学校に任されているのが現状である。小学校6年間に注力するだけでもその後の読書活動への影響は大きい。C委員が言った調査は、小学校に対して行うだけでも効果的ではないだろうか。本好きになるよう、心豊かになるよう朝の

読み聞かせは行っていて、華やかではなく技術がなくても、子どもたちは喜んでくれている。

副委員長：今まで答えてきたアンケートが活かされているか疑問を持つ。無駄に調査をするのではなく、こちらから発信してはどうか。例えば、ある中学校で読書ノートを配布している。予算をつけるか、学校へ配布を提案するか。全国の学校で様々な事例がある。横浜市の中学校図書館の改革を耳にしたことがある。古い本を廃棄し、子どもが興味を持つ本を置くようにし、居場所を作ったことで、来館者数が伸び、子どもが変わっていった。司書の仕事は、AIに取って代わられかねない仕事である。人ができることとして、本を読ませようとするよりは、人と場所をつなぐことがこれからの時代大切である。調査は良し悪しだと感じる。

委員長：第2次学都松本子ども読書活動推進計画策定にあたって、調査を行っている。スキルアップ講座を通して、講師が小学校で行っている取り組み、学校内での活動を知る機会が得られたのは大きい。学校に任せきりではなく、ともに歩もうとしている活動者も他の世代や他の現場での取り組みを知り、協力していくことが大事。

F 委員：本の現場は人と本。選書はとても大事である。誰に届けるか、相手に寄り添って本を渡したい。子どもがいて、本があって、人が届ける仕組みを丁寧に強化していきたい。

【協議事項1 人材育成への取組みについて】

事務局：説明

G 委員：読み聞かせボランティア運用方針の登録、更新について詳しく聞きたい。

事務局：3年ごとに講座を受けてもらう。継続更新の手続きは毎年行う。登録から3年後にダイジェスト版の講座を受講してもらう。

委員長：スキルアップ講座4回修了後、読書推進サポーターへの登録にはどの程度の実践経験が必要となるのか。

事務局：スキルアップ講座を2年の内に4回受講し、ボランティアとしての活動を最低5回程度やっていただき、さらに今までの経験やスキルを加味し、申請をしてもらう。推進委員会にかけた後にサポーターとして登録としたいと考えている。

委員長：今年度要件を満たした者は、次年度の初回の委員会で承認を得てからサポーターとして活動してもらうことになる。

B 委員：謝礼の単価の算出根拠について説明を求める。

事務局：サポーターは、2種臨時職員の1時間あたりの単価を元に考えたが、活動が多岐に渡るため、1,000円とした。活動報告書を月ごとに提出してもらいそれを元に謝礼を支払う。

読書案内人は有識者であり、1回の講座につき謝礼5,000円は、庁内の他の事業に倣った。活動は2時間と考えて3,000円となるようにした。

委員長：これらに関しては、第2次計画が策定された段階で、松本市、教育委員会で定義されたという解釈になる。有償ボランティアの人材を生かしていくという考え方に基づいていると考えられる。

F 委員：ボランティア養成講座とスキルアップ講座の謝礼の違いはなぜか。

事務局：当初一律5,000円で考えたが、スキルアップ講座は2名に依頼することや市外からも講師を呼べるよう10,000円で予算を計上した。市の基準に準じて考えている。

事務局：承認が得られたため運用方針の（案）の部分を消す。

## 【その他】

事務局：議事録に発言者の名前を記載してはどうかと G 委員より提案があった。

委員長：記載している委員会もあるが、記載していない委員会も相当数ある。皆の意見を聞き検討したい。

C 委員：記載はフルネームでなくてよければ、誰かは明記せずに、A、B、C 委員という記載を提案したい。

G 委員：松本市は開かれているべき。どのような人が委員をしているか市民に知ってもらいたい。どちら良いか悪いかとは言えないが、この会がオープンな場なら名前を載せても良いと考える。

委員長：委員の名前は、市のホームページや図書館概要等に掲載されている。委員会の内容自体は誰の発言を受けての意見かわかれば良い。A、B、C 委員の表記が良いのではないか。

A 委員：今までこういう会で名前を出したことがなかった。立場があって出席しているが、個人としての意見もあるため A、B、C 委員の表記が良い。

E 委員：名簿があるため、誰が出席しているかわかる。A、B、C の表記で良い。

D 委員：1 人がずっと発言しているわけではなく、活発な議論がされていることが伝われば良い。

議事録には、A、B、C 委員の表記にすることで決定。

## 【委員から】

A 委員：長期にわたって考えたい内容である。中学生が図書館に行かないことが大きな課題であり、棚に並んでいる本の中身も大事と考える。昔ながらの良い本もあるが、今の子どもが飛びつく本を置く等工夫して図書館が子どもの居場所になるようにしたい。読書感想文コンクールに今の子どもは忙しくほとんど提出していない。読書感想文を書くことが良い悪いということではないが、読書をする機会が奪われているような状況を知った上で、民生委員の活動を通して、ブックスタートの案内チラシ等を届けに家庭を訪問している。その中で、転入してきた家庭にとって周囲の人と接点を持つ機会づくりに本がなっていくと実感している。アンケートは強制するものではなく、5 年かけて考えた大きな提案をこちらから学校に向ける形が良い。

B 委員：ステレオタイプ化した質問紙ではなく、調査が目的にならないように、どういうことを図書館として知りたいか明確にした上で調査をしてほしい。中高生から急に読書好きになる可能性は低く、小学生からのケアを大事にしたい。

委員長：各現場の事例や取り組みを知ること、お互いに協力できる。

G 委員：自身は小学生の頃から読書が好きだったが、先生に外で遊ぶよう言われた経験がある。しかし、読書感想文コンクールで賞を取ったりし、本を読み続けた。両委員が言っているよう小学校で取り組んだことが、中学校、高校で続けられる。松本市、

図書館がやったことが学校につながってほしい。

委員長：第2次計画の概要版の中心に、関係機関すべてが並んで中核に位置している。各現場の活動を横断的にしていくことが第2次計画の目標になる。家庭読書に関しては、「家庭読書の日（うちどく）」が新たな取り組みとして打ち出されている。中高生への働きかけも一つの大きな取り組みとして掲げられている。本日の委員会での貴重な意見を踏まえつつ、5年間の目標の提案を、先を見越した形で示すと委員も期待を持って協議ができる。

また、今後委員は、読書案内人として参集される可能性がある。協力をお願いしたい。

以上